
Exclusive Matter

さばと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Exclusive Matter

【Nコード】

N3121BA

【作者名】

さばと

【あらすじ】

目が覚めたら知らない世界でお馴染みの異世界転生モノ。性転換要素も含まれます。新しい世界で少女は何を見て、何を学ぶのか。キーワードも募集中です。

夢から現から

僕は、眼前で白色の輝きを放つヘッドライトと、けたたましく鳴り響くブレーキ音に包まれた時、「これは死んだな」と思った。

何も見えない。何も聞こえない。時間が止まったような気がした。

僕は最期の力を振り絞って、その両手に抱えていたものを、対向車線に放り投げた。

ちよつと怪我をするかもしれないが、頭をぶつきたりはしないはずだ。

そして、僅かな間を置いて、耳を塞ぎたくなる様なノイズが聞こえた、様な気がした。

僕の意識はそこで途切れた。

それは、長い時間だったようにも思いつし、一瞬だったようにも思える。

思考が上手く回らない。今はただ、その心地よさに身体を任せていたい気分だった。

しばらくすると、じんわりと身体感覚が甦ってきた。ぼんやりとしていた意識も、段々とはっきりしてくる。

僕はゆっくりと、目蓋を持ち上げた。その、紅く紅く輝いた瞳を始点として、世界が僕を受け入れた瞬間だった。

どうやら、僕はどこかに寝かされているらしい。

それは、習慣のようなもので、仰向けになっている上体は、無意識下によって、ゆっくりと起こされていた。

何かこう、ふんわりとした違和感を覚えた。

身体を支えている白く細い掌が、柔らかなベッドにめり込んでいる。その手は、まっすぐに、僕の肩から生えていた。

これは、誰の手？

これは、僕の手？

少し考えてから、迷いようもない、ただひとつの結論に僕は辿り着いた。

受け入れたくない、受け入れようもない現実が、そこにはあった。

「なんだ・・・これ・・・」

その声はか細く、そして、いつも聴き馴染みのある音と比べ、かなり高かった。

血液が逆流したかと思った。気が付けば、一度止まっただけの心臓は、ばくばくと鼓動を繰り返していた。

恐る恐る、だけど飛び跳ねるように、僕はベッドから飛び降りた。

どうしようもない絶望感に打ちひしがれそうではあったが、僕が今やるべきことは、最後の抵抗が残されていない。

ひんやりとした床に両足を貼り付け、僕はそれを見下ろした。

控えめな山が二つ、そこにはあった。

存在を確かめるかのように、両手をその胸に当てたまま、すうつと下へスライドさせた。

その両手が、腰まで辿り着いたとき、その時になって初めて、僕は覚悟を決めたんだと思う。

股下には、何も付いてはいなかった。

それは、床に足をつけた時点で分かってはいた。分かってはいたが、理解が出来なかった。

ここで気絶をしてしまうほど、現実が甘くはなかった。僕は自力で、それらを全て飲み込む必要があった。

言い換えると、僕は、自身の姿を確認する必要があった。

そういう発想に至って初めて、僕は、その部屋を見渡す余裕を持つことが出来た。

その部屋は、勿論、昨日まで僕が住んでいた部屋であるはずもなく、また、僕の記憶のどこにも存在しない部屋であった。天井を見上げると、いつの間にか、ぼんやりとした灯りのようなものがふわふわと浮いていた。

ただ、目の前の光景に近いものを僕は知っていた。テレビなどでよく見かける、俗に、豪邸と呼ばれている部屋である。

発想が貧相なのは自覚しているものの、視界に映った装飾品や家具から放たれる品格によって、この部屋が高級品で溢れていることは、なんとなく想像が付いた。

そして、その家具のひとつに、姿見があった。銀色の彫刻が施されたそれは、僕の全身を写すのに、申し分ない大きさだった。

僕は、呼吸を整えた。もう既に、覚悟は決めたはずだ。

なるべく、平静を装い、すたすたと足音を立て、僕はその姿見の前に立った。

別に誰も見てはいないのだが、それは気分の問題だ。

無論、瞳は閉じたままである。知らない場所を視界を封じて移動するのは、少し危なっかしかった。

そして僕は、目蓋を持ち上げるのに、そのひとさじ一杯の覚悟を使い果たした。

柔らかな素材で作られたであろう、ゆったりとしたローブのようなものに包まれていた、その身体を、じっくりと観察する。

僕は、思わず吹いた。ちよつとだけ、むせてしまった。

目の前には、顔を紅くして咳き込む少女の姿があった。背の中頃まで伸ばされた銀色の髪が、左右にたなびいている。その眼は、強い意思を持つかのように紅く紅く輝いており、

その小さな顔は、バランスよく、優秀なパーツによって細部まで彩られていた。

目の肥えていない僕でも分かる。これは、ちよつとした美少女である。しかしながら、低身長もあいまって、綺麗と言うより、可憐な

印象を与えていた。

違和感を拭いきれないほどに、身長は低かった。普段の目線の高さとの感覚差ではあるが、体感でも20cmは低くなったように思う。そして、僕を思わず噴出させたのが、この背中から伸びた、透明な物体である。

姿見に背中を写してみる。左右で一对になったそれが三枚、背中から生えていた。透き通ったそれは、微妙に青色を帯びており、うっすらと背後の景色を覗かせている。

僕は意を決して、それに触れた。

突き抜けた。

「んなっ！」

覚えずも、情けない声が漏れてしまった。

一瞬、破れてしまったかと気を揉んだが、どうやらそうではないらしい。それは、指を通すと貫通し、指を抜くと元の形を取り戻す。まるで水面のようであった。

何で出来ているんだろう、などとふっと考えたが、どうせ分かるわけもなく、今はただ、それが自身の背中から生えていることに、驚愕を覚えるしかなかった。

ふと姿見を見ると、そこには背中から生えた羽根を、悩ましげな表情を浮かべたまま弄っている少女の姿が、映っていた。一体この少女は誰なんだろう、と僕は考えた。

分かっていた。理解していた。これは「僕」だ。

この、銀髪で紅い瞳を持った、妖精のような羽根を持つ少女。これは「僕」だ

「……………これは、絶対人間じゃないよね。うん」

鏡の向こうの少女は力なく表情を崩した。泣いてもいいですか。

どうして、どうしてこんなことに。僕はただ、電車を待っていただけなのに。

線路に落ちる子供。その子供にまっすぐ突っ込んでくる電車。ホームを走る僕。線路に飛び降りる僕。考える時間は与えられなかった。

無我夢中だった。

「お嬢様？」

だけど、後悔は無かった。もし、あの子供が残酷な結末を迎えてしまっていたとしたら、僕は、その後、一生後悔していたに決まっている。

「それに、僕は生きているんだ」

こんな姿になっただけ、僕は元気です。

天国の両親には会えなかったけど、僕は元気です。

「おい、クランお嬢様ー？」

何だよ、さつきから。せつかく僕が、天国の両親へのメッセージを届けていると言っのに、………って

「ひゃあああつ！」

「急に叫ばないでください」

いやだって、急に背後に誰かがいたら驚くでしょう、絶対。

気が抜けたような声を上げてしまったような気がするが、きっと気のせいだ。恥ずかしさは、決して表情には出さない。

「部屋の灯りがついておりましたので、また机で寝てしまったのかと思ひまして」

僕の目の前にいたのは、僕と似た姿をした少女だった。透き通った背中の羽根は勿論、割と見慣れた茶色の髪と、この身体と同じ紅色の瞳、身長は僕の目線よりかなり高く、紺色のドレスに純白のエプロンを巻きつけている。胸はそこそこだと思う。

この少女は誰だろう。僕のことを「お嬢様」や「クラン」などと呼んでいる。

「こんな朝早くから起きていらっしやるとは、お嬢様にしては珍しいですね」

その少女は、少しだけ訝しげな目線をこちらに向けた。なんだか心を見透かされた気分になる。

どう返答するべきか？

僕は彼女のことを知らないが、彼女は僕のことを知っているようだ。

ここで、「あなたは誰？」などと無粋直球なことを言えば、事態は悪化しかねない。

ただでさえ、現状は分からないことが多すぎる。最低限、僕は彼女を知っているという前提での行動を取らなければならない。

「べつ別に、ちよつとぐらい早起きしたっていいじゃない」

少し妙な語調になってしまったが、ここは強気に出るべきである。

と言うのも、彼女は、僕のことを「お嬢様」と呼んだ。つまり、立场上、僕の方が上位である可能性が高いのだ。

そしてもうひとつ、服装である。これは、文化環境その他によって異なるため、はつきりとは言い難いが、僕の記憶が正しいのであれば、彼女の格好は、給仕人の服装のそれである。

碎いて言うならメイドさんである。お手伝いさんとも言う。

ついでに、つんとそっぽを向き、機嫌を損ねたフリをしておく。これはオマケだ。

軽口を叩き返したのだから、これぐらいの態度を取らなければ釣り合わないだろう。

「それはそれは、失礼いたしました」

僕の反応に、彼女は謝罪の態度を見せた。が、その口角は上がっている。

思うに彼女は、僕、つまりこの少女にそれほど敬意を払っていない。古くからの付き合いか、あるいは、元来からの性格なのか。

ともかくにも、僕は、彼女と、普段から対等な関係を結んでいたのだと思われる。出来れば、彼女から様々なことを聞き出したい次第ではあるのだが、ある程度の情報が揃うまでは、無闇に下手を打つことが出来ない。

今は地道に、外堀を埋める作業を繰り返すしかないのだ。

「貴方は私を何だと思っているの？」

かなり刺のある言い回しだが、不敵な笑みを浮かべつつ言い放ったので、問題は無いはず。

「かの有名なメイプル家のご令嬢、クラン様で御座います」

彼女は、うやうやしく頭を下げたまま言葉を紡いだ。棒読みで。絶対ニヤニヤしてるよこの人。

「じゃあ、そのクラン様の目の前で不遜な態度を取っているのは誰かな？」

僕は、表情を崩さずに言葉を続けた。ここからが一番肝心である。

「酷いですお嬢様！ 私、レア・ローランドは生まれてこのかた、お嬢様に対する敬意を失った日は御座いません！」

「レア」は、そう言い放ち、どこから取り出したのかハンカチを目尻に当てて、おいおいと泣き声をあげ始めた。棒読みで。勿論、涙も流れてはいない。

「あーはいはい、わかったから」

僕はとりあえず、話を切り上げた。これ以上調子に乗って深入りしては、自爆してしまう可能性がある。

彼女の名前を確認できただけでも、大した収穫だと思いたい。

僕の態度を察したのか、レアはこちらに一瞥をやると、きりつと姿勢を正した。

「ところでお嬢様、そろそろお食事のお時間なのですが」

今の流れから、何がどうなっただて食事なのか分からないが、肯定を期待されるような口ぶりでは、こう答えるしかない。

「分かったわ」

僕が口を開くや否や、レアは、足早に部屋の扉に向かうと、その扉の傍に立った。今更ながら、給仕人としての本来の勤めに取り組み始めたようだ。

僕は、その後ろ姿を目で追いながら、ゆっくりと扉の前に向かった。あの扉の向こう側は、僕の知らない世界が広がっている。

扉を開く覚悟はあるか。そんな声が聞こえた気がした。

「どうかなさいました？」

僕の只ならぬ雰囲気伝わってしまったのか、レアが怪訝な表情をこちらに向けてきた。

「うつん、何でもないわ。行きましよう」

僕は、不安を振り払うかのように、静かに微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3121ba/>

Exclusive Matter

2012年1月8日01時46分発行